

『ミッドナイト・スペシャル』

千紘リカ

あらすじ

出張の夜、男はデリヘルの女をビジネスホテルの部屋に呼んだ。ベリーシヨートで迷彩服を着た女が大量の荷物をかかえてやってきた。男は最近妻と別れたばかりだ。

文字数 4,925

○夜の街

大通りに面して建つビジネスホテル。

○ビジネスホテルの一室（夜）

男（49）がドアをあける。

迷彩服を着た長身でベリーショート  
の女（36）が大きなバッグを引き  
ずるように入ってくる。

男「……？」

女はバッグを室内に置くとすぐ廊下  
に出て別のバッグを運び入れる。

ポカンとその様子を見ている男。

女「なに、ポーツと突っ立ってんのよ」

男「え？」

女「手伝いなさいよ」

男「あ、はい……」

○同・ドアの外（夜）

廊下には荷物がまだ山のようにある。  
男はそのうちの一つを持ち上げる。

重たそうである。

男「（ブツブツ） いったい、なにが入ってんだ」

○元のビジネスホテルの一室（夜）

男は女に手を貸して大小様々な荷物を次々運び入れている。中に二人がかりでないといけないような大きなケースまである。

語り「ここは南国のビジネスホテルの一室である。男はこの町に出張でやってきたごく平均的なサラリーマンだ」

○夜の歓楽街（数時間前）

男が歩いてくる。

男、ポケットティッシュを受け取る。  
裏返してみると、デリヘルの広告。

語り「男は半年ほど前に妻と別れたばかりで孤独だった」

○元のビジネスホテルの一室（数時間前）

男がベッドに腰かけ、ポケットティッシュを手には電話中である。

デリヘル受付嬢「（電話）コースはお決まりましたですか？」

男「Bコースで」

デリヘル受付嬢「（電話）かしこまりました。ただいまキャンセルをしております……」

語り「（電話の声に被って）いや、待てよ。はるばる南国くんだりまでやってきて、Bコースってゆうのもなあ、と男は思った。かといってAは予算オーバーだし……選択に迷うのはこの男の悪い癖だ」

デリヘル受付嬢「（電話）もしもし……もしもし……」

男「あ、やっぱり、ミッドナイト・スペシャルでお願いします」

デリヘル受付嬢「（電話）では、コースはミッドナイト・スペシャルに変更でよろ

しかったですね」

男「（少々上ずった声で）あ、はい、よろしかったです」

語り「それは店では最上級のコースで値段もそれなりだ。それゆえ、男のテンションは上がった」

○元のビジネスホテルの一室（現在―夜）

女は床にあぐらをかいて坐り、黙ったまま無表情でバッグの中から茶色い紙袋をいくつも取り出している。床に置きたびにドスン、ドスンと鈍い音が響いた。

男はベッドに坐り、所在なげにその様子を見守っている。

語り「いっただい、なにを始めようっていうんだ？ 男はこの手のものを久しく利用していなかったなので勝手がわからないのである。それにしても客商売にしちゃあ愛想のない女だな、と男は思った。ニコリ

ともしない。それにそう若くもない。三  
十半ばってところだな」

女「（男を見上げて咎めるような口調で）は  
い？」

男「いや、別に（とかぶりを振った）」

女は黙したまま作業を続ける。

語り「ま、いいか。五十を目前にしたおじさ  
んにはチャラチャラした若いコよりこの  
くらいがちょうどいい、と男は思った」

女が紙袋の一つに手を入れた。取り  
出したのは拳銃だ。

男は思わず声を上げそうになった。

女は他の紙袋からも次々銃を取り出し  
始める。

語り「ここで男は初めて合点がいった。迷彩  
服に銃器の数々。モデルガンを使って戦  
争ごっこでもやろうってわけか。面白い  
プレイを考えたもんだなあ、と男は思っ  
た。女のそっけない態度も演出というこ  
とか。この業界も生き残り争いで大変な

んだ、と男は要らぬ心配までした。よく見ると、女は切れ長の目をしたなかなかの美人だった。それにベリーショートの髪を伸ばせば、別れた妻に似てないこともない、と男は思った」

男の元妻の声「別れてほしいの」

○マンションのLDK（回想―夜）

男は今まさに帰宅したばかりの様子で緩めかけていたネクタイを握ったまま固まっていた。

語り「それは男にとってまさに青天の霹靂と云える事態だった」

男「え、え、どういうこと？」

男の元妻「ごめんなさい」

男「ごめんなさいって。え、意味わかんないんだけど」

男の元妻「もうずっと前から考えていたことよ。気づかなかった？」

男「……」

男の元妻「（ポツリと）こんなはずじゃなかった」

語り「結婚して十三年。子供はいない。妻の父親は取引先の専務で、行き遅れた娘がいるんだが、どうだ、と冗談交じりに紹介されて付き合うようになり、間もなく結婚した。妻は四十代半ばを過ぎた今でも自慢したくなるような美人だったが、日々の生活に明らかに退屈していた。だが、それがなんだ、と男は思った。この先行き不透明な時代に平穩無事で何が悪い」

○元のビジネスホテルの一室（夜）

女は相変わらず無表情で慣れた手つきで銃を次々点検していく。

男は感心したように見ている、

男「へえー、手慣れたもんだ」

女「（軽く舌打ち）ジロジロ見てないで、さっさとしてくれない」

男「え？（と女を見る）」

女「（無言で作業を続ける）」

男「（嬉しそうに）ああ、はい、はい。そういうことね」

語り「なにが、こんなはずじゃなかった、だ。単調に続く毎日に退屈していたのはお前だけじゃないんだ、と男は思った。オーケイ、今夜は朝までミッドナイト・スペシャルだ」

男は立ち上がると、ズボンのベルトを外してチャックに手をかけた。

女「（手を止め、顔を上げ）なにやってんだよ」

男「え？」

女「早く銃を選びなって云ってんだよ」

男「ああ、そっち……いやあ、だからオレは」と云いかけて口をつぐむ。

女「（鋭く）だから、ナニ？」

男「（困惑）あ、いや……」

語り「つまり、男はこう云いたかったのであ

る。オレの銃も見てもらおうと思ったんだ、と。だが、今時そういうのはアウトだったなと思ひ直してやめたのである。男は普段からそういうことには人一倍気をつけていた」

女がタバコに火をつけた。

そして、フーッと長く気持ちよさそうに煙を吐いた。

ちようどその煙が銃を選ぼうとかがみ込んだ男を直撃した。まともに煙を吸ってゴホン、ゴホンとせき込みながらも、

男「（目を輝かせて）ニューナンブにワルサー。おうツ、これはスミス&ウエツソンのだ。えー、どうすっかなあ……そうだ、ど、れ、に、し、よ、う、か、な」

女「（男のセリフに被って）あー、じれったいなあ。いいから、これにしな」

と男に拳銃を一丁差し出す。

男「（受け取り、感触を確かめながら）うん、

オモチャにしてはなかなかの重量感だ」

と、いきなりパンと乾いた音。

男「ウォーッ」

と、反動でベッドへひっくり返った。

女「バツカ野郎ッ、あたしを殺す気かよ」

男「す、すみません。弾が出るとは思わなか

ったから」

男はひっくり返ったまま、まだ右手で

銃をしっかりと握っていて、その手は

小刻みに震えている。

女「おい、こら。銃口こっちに向けてんじや

ねえって」

男「す、すみません」

と云いながら、震えを止めようと左手

を添えてみる。

女「いいから銃を置けッ」

男「あ、そっか（と銃を置き）置きました」

女「危なっかしいヤツだなあ」

と、額の汗を拭う。

と、窓の外でパンパンとさく裂音がし

た。

男、「何だろう」という顔つきでカーテンをあけて窓の外を見る。

男「う、ウソだろッ」

○ホテル前の通りの俯瞰（夜）

戦車や装甲車が隊列を組んで進んでいる。そして、遠い空には数か所で黒煙が上がっている  
パン、パンとさく裂音。

○元のビジネスホテルの一室（夜）

男「ヒエー」

と床に尻もちをつく。

女「うるせえなあ」

男「いや、だって……」

女「いいから早くカーテンを閉めな」

男は体を起こそうとするが、起き上がれない。

男「ダ、ダメです」

女「なにがダメなんだ？」

男「腰が抜けたようです」

女「チエツ（と舌打ち）」

女は落ち着いた様子で部屋の灯りを消すと、窓に近づき外を伺う。

女「（ひとり言）思ったより早く来やがったな」

男「（オロオロ、誰に云うともなく）いったい、ど、どうなってるんだ。これも演出？ いや、それはないない」

女は窓から離れ、銃を選び始める。

と、にわかには窓ガラスがカタカタと鳴りだす。

男「なんだ？　なんだ？」

と、男は床を這って行って窓に近づき、恐る恐る窓から外を見る。

女「バカッ、頭を低くしな。吹っ飛ばされるぞ」

とっさに窓の下に身を伏せる男。

次の瞬間、へりが轟音とともに近づい

てきたかと思うと、銃弾をさく裂させて、アツという間に遠ざかっていく。

粉々に碎け散った窓ガラスの破片を頭から被る男。

語り「男は悟った。これはごっこなんかじゃない。ホンモノの戦争だ」

再び近づくへりの轟音。

男は頭を抱えて床を這いずり回る。

語り「それは海の向こうのはるか遠い国の出来事だと男は思っていた。それがいつの間……」

女は立ち上がり窓の外に向き直ると、割れ残った窓ガラスを銃の先で突っいて落とし、

女「これでも食らえッ」

と絶叫して銃をぶっ放す。

男はまだ床を這いずり回っている。

語り「一般市民の知らないところで事態は着実に進行していて、気づいた時にはもう

引き返せないところまできている。戦争とはそういうものだ。そんな話を男は以前どこかできいたことがあった」

やがて、へりの轟音が遠ざかって静けさが訪れる。

語り「こんな時におかしなものだが、男はなぜか別れの朝の妻とのやり取りを思い出していた」

#### ○マンシヨンのLDK（回想）

男と男の元妻がダイニングテーブルで向き合っている。二人とも押し黙ったままだ。

語り「離婚については夫婦でもう何度も話し合ってきた。男は懸命に説得し、妥協点を見出そうと譲歩もした。それでも妻の意志が揺らぐことはなかった。そして、もうお互い話すことはなかったのだ」

男「（チラッと壁の時計を見やり）時間はいいのか？」

男の元妻「うん。まだ、もう少し大丈夫」

男「そうか」

窓の外には雪が舞っている。

男の元妻「紅茶さめちゃったわね。入れなお

すわ（と立つ）」

男「いや、いい」

男の元妻「すぐだから」

男「いいんだ、これで」

と、男はカップを取り一口飲む。

男「別れの朝に飲む紅茶は冷めたモノと決ま  
ってるんだ」

男の元妻「フーン」

男「え？」

男の元妻「いい加減に直した方がいいわよ」

男「直す？」

男の元妻「時々そういう訳の分からないこと  
を云う癖」

語り「男は精一杯強がってジョークを云った  
つもりだったが、妻には通じなかった。

昔、そんな歌詞の唄があったのだ」

男は苦笑いを浮かべて頭をかいた。

○元のビジネスホテルの部屋（夜）

女が窓の外に向かって必死に応戦している。ただし、音は聞こえない。

男はもう這いずり回るのをやめて、頭を振って浴びた窓ガラスの破片を払い落としたり、服の乱れを直したりしている。

語り「玄関まで見送りに出た男に妻は云った」  
男の元妻の声「今までのいろいろありがとう。」

これから新しい景色を見に行くの。あなたもそうするといいわ」

語り「妻はこれまで見たことがないような晴れ晴れとした、そして美しい顔でそう云った。妻が見る新しい景色とはいったいどんなものなのか、それは男にはわからない。そして、男もまだそれを見つけてはいない。だが、今自分がやるべきことくらいはわかっている、と男は思った」

音声に戻ってくる。

女は窓の下に坐り、弾丸を込め直している。

その足元に、さっき男に渡した銃が床を滑ってきて止まった。

男「（にわかには自信満々に）こんなもんじゃ話にならない。もっと強力なのがあるだろう」

女「あるけど。オッサン、使いこなせるの？」

男「バカにするな。甥っ子とゲームで対戦して、まだ負けたことはないんだ」

女「甥っ子っていくつなんだ？」

男「小六だ」

女「（フツと小さく笑う）ドヤ顔で云うことかよ」

語り「女が初めて笑った。確かに美人だが、妻には少しも似ていない、と男は思い直した」

女「じゃあ、これ使ってみな」

と、女は傍らの銃を男に差し出す。

男「へえー、自動小銃じゃないか」

語り「弾が発射されると同時に火薬ガスの排出圧力を利用して、次の弾が自動的に装填される。つまり、引き金の操作のみで連発が可能な銃だ。引き金を引いている間ずっと連射され続ける全自動式と、発射の度ごとに引き金を引きなおよす半自動式とがある。ちなみにこいつはどっちだあ……」

男はかかえた銃をまじまじと見て考え込んだ。

すると、にわかには銃撃戦が激しくなる。

女「さあ、行くよ」

男「（意気揚々と）ああ、そうだな」

男と女、目と目で合図を交わすと、同時に構えた銃を窓の外に向けた。

（おわり）